郷土摂津いにしえ通信

平成十年八月一日　第四号
発行
摂津市三島一丁目一番一号
摂津市教育委員会
生涯学習部　生涯学習課

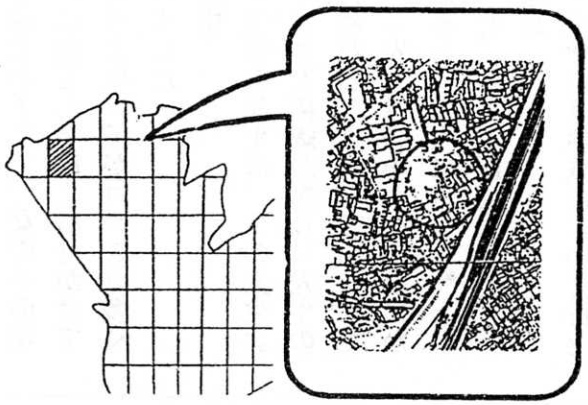
□■□ 不定期連載 □■□

摂津市域の遺跡

摂津市域には現在、五つの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があります。これから、順次これらの遺跡について紹介していきます。

① 蜂前寺跡

【所在】　千里丘三丁目
【種類】　寺院跡
【時代】　奈良時代後期
（大阪府文化財地名表より）



◎平成九年度の発掘調査により、まだまだ断片的ですが蜂前寺が建立される以前の古墳時代の状況が分かってきています。
　これからも周辺地域の調査より新たな発見があるかも知れません。

お知らせ

◎大阪府内で開催される展示・講演会・シンポジウムなどの情報をいちはやく、お知らせします。

大モンゴル展　草原の遊牧文明

【と　き】　七月三十日から十一月二十四日まで
【ところ】　千里万博公園内国立民族学博物館
【開館時間】　午前十時から午後五時
【休館日】　毎週水曜日（九月二十三日は開館、翌日は休館）
【入館料】
おとな　一一〇〇円
高大生　六五〇円
小中生　三五〇円
※常設展もご覧になれます。
☎　〇六ー八七六ー二一五一

第四十四回 埋蔵文化財研究集会

五世紀における政治的・社会的変化の具体相

【と　き】　八月二十九日・十時から十八時
八月三十日・九時四十五分から十五時三十分
【ところ】　北岡一丁目一三藤井寺市民総合会館大ホール
【内　容】
　五世紀は古墳時代中期に属します。この時代には古市・百舌鳥古墳群に代表されるような大型の古墳が築かれます。これら大型古墳が築かれる政治的・社会的背景にせまります。
【参加料】
無料。当日資料代が必要です。
※毎回、一般の方々も多数参加される研究集会です。皆様方のご来場をお待しています。
☎　〇七二九ー三九ー七〇二〇

おじいさん・おばあさんに聞きました

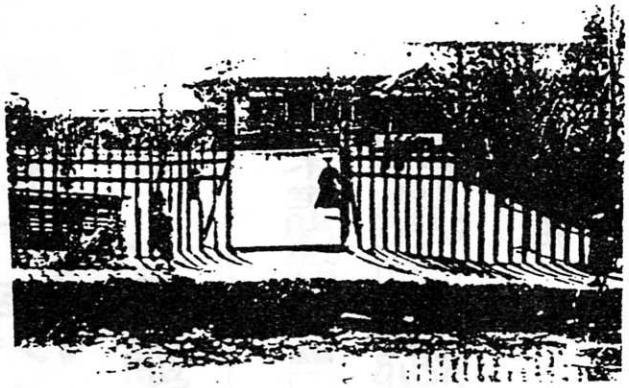
摂津市域　ちょっと昔のくらし

その４　「遠足など学校生活」　大正から昭和初期

昔の学校

・小学校６年（義務教育）を卒業すると、高等小学校（高等科、２年間）または中学校（女学校）に進学しました。

・中学校に進学するのはごくわずか（ほとんど勉強のできる地主の子）で、女の子の場合は高等小学校にも行かせてもらえない子がけっこう多くいました。



→初めて学校らしく出来た鳥飼小学校（大正三年三月撮影）

先生

・学校の先生は、今の先生よりずっと権威があり「先生の言われることは何でも信じた」「先生は恐かった。なにかあると『先生に言うぞ』といった」などと聞きました。

遠足

・低学年は地域によって行き先が違ったようですが、高学年になると同じような所に行きました。

・遠足とは、遠い所でも歩いて行くものでした。（左記のうち、布引の滝のみ電車）

・修学旅行は、伊勢神宮と決まっていました。

○高槻三島江のヤエモン屋敷（桜の名所）
○鳥飼の藤森神社
○一津屋の渡しとこう門
○柴島浄水場（当時『東洋一の規模』といわれた。）
○茨木安威のイボ水さん（神功皇后の史蹟）
○千里山の遊園地
○四条畷飯盛山
○島本町桜井の駅跡（楠木正成父子別れの史蹟）
○継体天皇陵
○勝尾寺
○阿武山
○竜王山
○神戸布引の滝

§「新京阪（現阪急）が通ったとき（昭和３年）、『電車見』に連れていってもらいました。普通電車は二輌、急行は三輌で走っていました。」（味舌下での聞き取りから）

§「高学年のころ、竜王山へハカマをはいてゲタで行きました。」（鳥飼下）

§「遠足の団体を、淀川の渡し舟で向こうへ渡すのはたいへんでした。そのころはエンジンの無いカイの舟でしたから。」（鳥飼下）

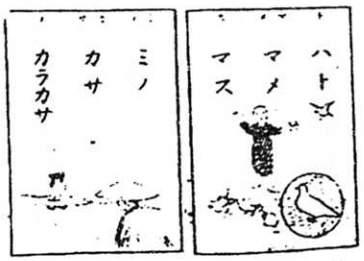
通学の服装

§「着物に帯をしめて、ゲタをはいて学校に行ったのです。よっぽどエエ衆でないと、靴なんかはかしてもらえませんでした。雪のときはゲタの歯に雪が詰まって、歩きにくくて困りました。」（鶴野）

プール

§「学校にプールがなかったので、神崎川の江口橋の上流へ水泳訓練に連れていってもらいました。ひもの付いた帽子にフンドシを入れて行きました。」（味舌）

担当（源）

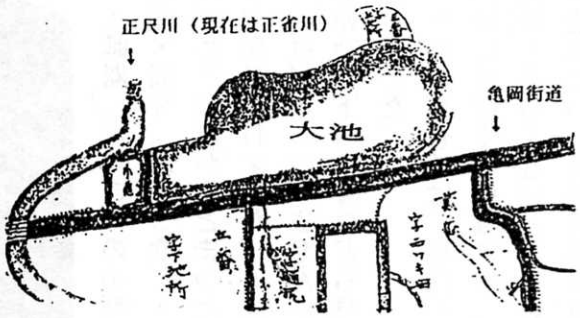


←大正七年発行『尋常小学校国語』

郷土史コーナー

前号の『味舌の村々』の続き

味舌上村　味舌郷五か村の一つ。千里丘陵の裾に位置し集落西方を山田川が流れています。東は坪井村、西は正雀川を境に吉志部郷東村（現吹田市）に接しています。慶長十年（一六〇五年）の摂津国絵図に「上村」と載っており天和三年（一六八三年）頃の摂津国御料私領村高帳によりますと、村高五〇九石余。領主の変遷は江戸時代の初頭に織田信長の弟長益（有楽）の知行地となり、長益から子の大和戒重藩（のちの芝村藩）藩主長政に譲られた。以後幕末まで同藩が治めました。天保十四年（一八四三年）の村明細帳（関西大学図書館蔵）によりますと、年貢の津出しは味舌下村浜（現在の浜町）であったようです。家数五一（三家は同居）・人数は二三一人、牛十一頭、水車小屋が一軒あり、麦粉をひいていました。集落は市場・竹花・中内の三垣内からなり、中内には郷蔵がありました。農間余業として、縄・俵・莚作りや木綿織のほか、古手・古道具・古金を商う者が八人いました。瓦家・干鰯屋・質屋各一軒があったそうです。又、六五〇石の酒造株が免許されていましたが、天保の頃には休業しています。酒は安永（一七七二年～八一年）頃までは造られていました。用水の六割は正尺川から引水した大池（現在の市場池）・小池に頼り、残りは山田川の上之堰・柳堰・砂馬場堰から取水していましたが早損がちであったといわれています。寺院は金剛院と専称寺と安樂寺があり鎮守は須佐之男命神社。



味舌下村　味舌郷五か村の一つで郷南端に位置しています。村の東で境川・茨木川・沢良宜川が安威川に、西で安威・神崎両河川が合流するというきわめて低湿な水害多発地でありました。村の中央を山田川が流れ、上手は正音寺村と接して、集落は山田川と茨木村方面への道が交差する地域の両側に広がっていました。「大阪府全志」によれば当村は味舌天満宮・明善寺を創始したという馬場当次郎尚久が、中世末期に味舌郷で開いた馬場前村に始まるといわれています。文禄三年（一五九四年）の太田郡味舌之内下村御検地帳に「味舌之内下村」とみえ、九五七石余が高付されています。領主は味舌上村と同じく江戸時代を通じて織田氏でしたが、流作場のみは幕府領で、文化七年（一八一〇年）以降は高槻藩領地になりました。天保三年（一八三二年）には村内の三軒に四〇〇石の酒造株が免許され、同一二年の酒造高は一九七石でした。当村は安威川の沿岸村として、その水運にもかかわってきました。村では安威川往来の屎船を所持し、過書方との間でしばしば争論を起こしており、天保一一年には当村百姓が神崎川船渡株を江口村（現在東淀川区）より入手しています。寺院は明善寺と明教寺があり、現存しないが安養寺や宮寺の観音寺があったそうです。鎮守は味舌天満宮。

（つづく）

※平凡社「大阪府の地名」より　担当（若荷）

考古雑話

第４回　わかりつつある縄文時代の生活④

三内丸山遺跡の発掘と縄文時代の生活

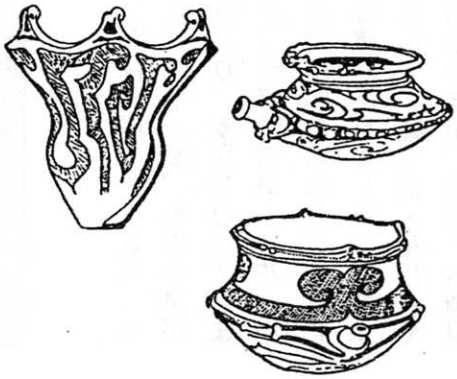
縄文時代のはじまりは、土器の出現にあると言われています。縄文時代の土器の特色は文字どうり縄を押しつけた装飾や必要以上に過飾された口縁部（土器の上端のふち）などが挙げられます。縄文式土器という名称から装飾には縄だけであったと思われがちですが実際は、貝殻・より糸川原石・木片などさまざまな道具を使って装飾を施しています。また意図的に文様をすりけしている土器もあります。

縄文式土器は、日本独特で世界的に類例がすくないという指摘もあります。また技術面だけでなくその美術的価値も高く評価されています。

実際、博物館などで縄文式土器を目にしましたら、その力強い躍動感に圧倒されるものがあります。いまとなっては、彼らの精神的な心象風景には直接触れることはできません。しかし、約一万年の時をこえて現代に姿をあらわしたこれらの土器などの遺物は、充分に私たちの心に彼らの豊かな心を伝えてくれます。

次回より、三内丸山遺跡の発掘調査の成果を中心に、この豊かな縄文時代の生活の一端を紹介していきたいと思います。

（つづく）



◎さまざまな形の土器
（図解考古学辞典より）

東正雀の試掘調査

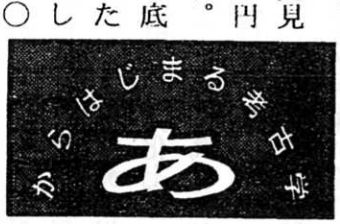
東正雀一三番地における試掘調査では、おおきく七層に分けられる堆積が確認されました。最下層の河川氾濫堆積と中近世の河川氾濫堆積にはさまれる形で、古墳時代の堆積が確認されました。

土師器（はじき）の小型丸底壺・高坏（たかつき）・甕（かめ）などがまとまった状況で発見されました。また、今回は展示していませんが小型動物の下顎の骨なども見つかりました。

今回の調査地は、現代の山田川に近接する地域です。当時もおそらく近いところを川が流れていた可能性があります。当時の人々は水辺でさまざまな『おまつり・祭祀』を行っていたと考えられています。古墳時代の祭祀遺跡は全国でもたくさん発見されていますが、祭祀行為についてはまだまだ充分に解明されていません。これからも周辺地域の調査をすすめていけばその一端がわかってくるかもしれません。

【え】　円筒埴輪

○埴輪（はにわ）と言いましたら人物や動物の形を思い浮べるかもしれませんが、畿内で古墳時代前期から中期にかけて、最も多く発見される円筒埴輪のは円筒埴輪です。



○バケツの底をくりぬいたような形をしています。○円筒埴輪は、古墳にある段の平坦面や古墳をめぐる周濠（しゅうごう）の肩などにたくさん配置されていました。

担当　（伊部）